

研で飼育されているギランバレー症候群様の症状をしめしたサルについて、HLA-B35 の抗血清あるいはモノクロナール抗体を用いて、反応性を検討したが、結果は陽性であった。この事実は、サルのギランバレー症候群の発症機構がヒトのそれと異なっている可能性をしめしている。今後ヒトとサルのMHC 系を遺伝的、血清学的に比較、検討することにより、MHC 系の進化の過程を明らかにしていきたいと考えている。

自由：40

植物におけるペプシン阻害物質の検索と同定

手塚修文（名古屋大学・情報分化文化学部・自然情報学科）

サルが植物の葉・蕾・木の実（種子）などを食べた後に、その植物に含まれる様々な成分が消化機能に与える影響、特にペプシンの活性に及ぼす効果について調べることを目的とした。

種々の植物の葉・蕾・種子などのサンプルを破碎して、そのホモジネート（中の成分）によるペプシン活性、つまり蛋白質分解能（proteolytic activity）に及ぼすホモジネート成分の影響について調査した。ホモジネートを遠心分離して得られた上清画分を用いるよりもホモジネートそのものを用いた方が咀嚼した状態に近いので、ホモジネートによる蛋白質分解能に対する効果なるべく胃の活動中の状態に近い条件で測定可能な実験系を確立してペプシン活性を測定した。葉では、サンゴジュ：61%、ヨモギ：48%、サクラ：39%、シイ：11%、クヌギ：27%、クス：26%、ツバキ：11%、ススキ：4%、ギシギシ：0%の阻害効果が見られた。また、ツバキ蕾では58%、ドングリ種子では25%、シイ種子では17%の阻害が見られた。

この事象はサルの食性・嗜好と深い関係があると思われる。さらに、この研究は植物中の物質がペプシン活性を阻害するという最初の発見であり、蛋白質分解能と食性に関する研究の重要な端緒を開いたことになる。

自由：41

正常およびエンドトキシン投与サルにおける外因系血液凝固プロテアーゼインヒビター（TFPI）の発現調節機構の検討

加藤久雄、円城寺慶一

（国立循環器病センター研究所）

TFPIは、組織因子／第VIIa因子複合体並びに第Xa因子を阻害する外因系血液凝固系の有力な制御因子である。細菌性炎症反応においては、細菌性エンドトキシンによって組織因子の発現が誘導され、血液凝固反応が開始される。そこで、炎症反応におけるTFPIの役割を明らかにする目的で、サルTFPIの発現調節機構について検討を行った。まず、各臓器での発現をノーザン・ブロッティングにより検討した。ヒトやラットでは肺、腎臓、心臓などが主要な産生臓器で、肝臓での発現は認められず、肝癌由来細胞でのみ発現が認められているが、サルでは肝臓においても肺に次ぐ強い発現が認められた。ヒトやラットにおける主要な産生細胞は血管内皮細胞であることから、この発現は肝類洞内皮細胞に由来することも考えられるが、細胞分画により得られた肝実質細胞でもTFPI mRNAの発現が認められたことより、サルにおいてはヒトの場合と異なり肝臓も主要な産生部位であることが明らかとなった。この発現は抗TFPI抗体を用いた組織染色によっても肝実質細胞が染色されることから、蛋白質にまで翻訳されて産生されていることが明らかとなった。エンドトキシン投与によってはその発現量は変化が認められなかった。この発現パターンは、ニホンザル、カンクイザル、アカゲザル、ワタボウシタマリンなど調べたサル全てにおいて共通であった。しかしながら、各臓器で発現しているmRNAのサイズはヒトと同じく2種類の分子種が認められた。次にヒトとサルの発現様式の違いを明らかにする目的で、発現調節領域の単離、構造解析を行った。ニホンサル白血球DNAライブラリーより5'非翻訳領域を含むエクソン1をプローブとしてスクリーニングを行い3つのクローンを得た。これらによって転写開始点前後約30 kb、全長約60 kbの範囲をカバーしていた。転写開始点は、ヒトよりも約20 bpほど下流であったが、この領域の相同性は95%以上であった。現在、ヒトとサルTFPI遺伝子の5' flanking領域にレポーター遺伝